
傷付くまで痛みを知らない

うすい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷付くまで痛みを知らない

【Nコード】

N8564B

【作者名】

うすい

【あらすじ】

婦人警官の物語です。とても長編なのでまだ連載中で掲載しました

傷付くまで痛みを知らない

第一章 事件

これが世の中の人々を守ることなのだろうか？

交通部の交通規制課の婦人警官の入渡冴子は、警察官になって以来そんな疑問を持ち続けていた。

交通規制課に勤務しているため冴子を取り締まる人間は、ちょっと気の緩んだドライバーがほとんどである。

道路交通法違反という名目があるにはあるのだが、冴子の心の奥底、それは立場上決して表には出せない部分には、ドライバー達のささやかな幸せを奪い取っているのではないかとさえ思えてくる。

専用の駐車スペースのない大規模な公団住宅や都営住宅に駐車されている車のほとんどは、遠くから親戚が可愛い息子や孫を訪れに来たのだろう。

取り締まられる人間たちは、それこそ犯罪者とはほど遠く、悪意のある人間とは思えない。

警察官という職業でありながら、悪意のない人間を取り締まるのは、辛い部分でもあった。常習性のある人間ならともかく、何かの事情でたまたまというケースだと余計に辛い。

そして今日も、冴子は交通規制課の先輩の宮川吾郎巡查長が運転するミニバトの助手席で、駐車違反車のタイヤに先端に白いチョークの付いたスティックに違反の証を刻んでいた。

勤務中に、恋人の日高直輝に次に会える日はいつだろうか？ などと考えてしまう。警察官という厳粛な職務に就きながら、我ながら不謹慎だと思う。

もうすぐ五月になろうとする春の晴れ渡った心地よい陽気は仕事の辛さを和らげてくれ、呑気な事を考えてしまう余裕すら与えてく

れる。

『今の自分を幸せに思わなくちゃ。』と冴子は一日のうちに何度か自分自身に言い聞かせる。

理想と現実のギャップが大きかったのは事実であるが、冴子にとって警察官になることは夢という言葉では安っぽいほどの重みを持っていた。警察官になることが使命だったそれとも信念だったというべきか？

いずれの表現を用いても、冴子の気持ちを表現しきれぬ重みを持たないだろう。

それぐらいの意気込みで冴子は、両親の反対を押し切り、警察学校に入学し射撃、武術などの格闘技の訓練を受け、そして警察学校を卒業した。もともと地区を代表するぐらいの陸上選手だったので、警察学校を入学するだけの身体能力は備わっていたので、警察官になるまでの敷居は冴子にとって高くはなかった。警察学校側からしてみれば欲しい人材であった。

唯一、妨害するものがあるとすれば両親からの反対であった。

さらに冴子の本音の部分では、交通規制課よりも凶悪事件を扱う刑事部の捜査第一課あるいは、事件が発生して初動捜査を行う機動捜査隊に所属したいという強い願望があった。しかし、所詮は警察署という組織に属する一つの駒であることには変わりはなく、上層部が適材適所と判断した結果、冴子は交通部の交通規制課に配属されて現在に至っている。

一般的に婦人警官というと、ミニパトカーに乗っている姿をイメージしがちであるが、これは任務に置いて凶悪犯罪者を向こうに回す機会が少なく、危険性が少ないことから必然的に女性警官がそのポジションを占める割合が多くなっていった歴史があった。

もっとも、それは警察組織の外側の一皮しか見た事がない一般庶

民の偏見でもある。

被害者が女性の場合、その事情を聞く任務には女性警官が適任であったし、容疑者の取調べの際にも、時と場合によるが女性警官が適任の場合もある。

鑑識課のような一定以上の専門的知識が必要な課には、女性が採用される事も少なくない。

警察官という職業は、男性が大部分を占める社会であることは事実であるが、女性の存在を抜きにしては成り立たないのも事実である。刑事部のようなもつとも命の危険に晒される部署への女性警官の需要も高まっている。

一般庶民が目にする警察官は、特別の場合を除いて女性は勤務できない交番勤務の警察官かパトカーぐらいのものである。

何かの事件の容疑者になるか被害者になるかして、警察にお世話にならないと交通部以外の女性警察官の存在というのはわかりにくいのである。

冴子も懇願書を提出すれば、もしかしたら刑事部に配属させてもらえるかも知れなかった。しかし、その願いを叶えるには両親からの理解が得られないことは明白であった。もちろん、冴子自身はもう立派な大人であるから、そんな両親の反対など押し切ることは難しい事ではない。

だがそれは、娘を危険な目に遭わせたくないという親心からの思いであることは十分に伝わっていたので、その親心を踏みにじってしまうのは、ためらいの感情を芽生えさせ、刑事課への転属しないまま交通規制課で働いて今日に至っている。

冴子と宮川を乗せたミニパトカーが桜森保育園の横を通りかかった時に、「ガシャン！」というガラスの割れる音と共に園児たちの悲鳴がミニパトの中まで聞こえた。

おそらく園児が石でも投げて窓ガラスでも割ってしまったのか？

もしかしたら園の内部の職員で対処できるようなトラブルの可能性も想定できたが、警察官がいる場所で異常を感じさせるような事態があつたならば、その状況を確認し、適切な対処をするのも職務の一つである。例えば酔っぱらいの喧嘩に遭遇して、見て見ぬふりをするのならばもはや警察官ではない。

ミニパトを、外部からは一番見落としの効く正門前に停車させても中の状況は把握できなかったが、冴子の頭にも宮川の頭にも、園児の起こしたトラブルであろうと予測されるのが自然の成り行きであつた。

園児のような子供を相手にするには、婦人警官が対処した方が良い。男性の警察官が相手にした場合、その威圧感のためお灸が熱すぎてしまう。

「入渡君。頼むよ」

冴子はミニパトの無線機を取り、署に連絡を入れた。

『こちら警視四〇。パトロール中に桜森保育園において、ガラスの割れる音及び園児たちの悲鳴が聞こえたために入渡、現場に向かいます』

『了解！』

予定外の行動を取らなければならない場合、連絡は必須だ。

冴子は保育園の正門の前に立つた。ここから見える範囲では人影は見えなかつたので、奥の部屋で何かが起こっている。

門扉は外部からは開かないように施錠されていた。しかし、施錠されているといっても、大人がよじ登って門扉を飛び越えるぐらい容易なつくりである。

門の右側にインターフォンのチャイムがあつたので、押してみた。30秒程待ってみたが反応がない。ガラスが割れるようなトラブルがあつたのだから、来客に対応するどころの余裕がないのかもしれない。

この門の向こう側で何か非常事態が起こっているのは事実である

ので、冴子は園の門扉をよじ登り、そして飛び、女性にしては長身でスラリと長い脚が宙に舞い、きれいに飛び降りた。

職務上、ヘアスタイルにも制限があり、化粧も満足に出来ない婦人警官という職業にしておくにはもったいない二重まぶたで端正な顔立ちをしている冴子を、パトカーの中で待つ宮川は、何も警官などにならなくてももつと女性らしい幸せがあるだろうに。と彼女の父親気分にもなったように内心考えてしまった。

その反面、警察官としての素質は、厳しい目で見ても評価せざる得なかった。さらに彼女は犯罪捜査に必要な心理学などに妙に詳しい。

冴子は園庭を小走りに走った。

園の表側から事態を把握できないので、裏口に回ることにした。

そこに園児数人を従えた保母と遭遇した。保母の顔色は蒼白で放心状態に近い。

「警察です。今、こちらからガラスの割れる音が聞こえましたので……」

こちらが言いたい事が終わらないうちに、
「変な男の人が、鉄の棒を持って、みんなを襲おうとしているんです！」

警察服を着用した冴子の唐突な出現がこの保母にどれだけ安堵を与えた事であろう。

その時。「彩子ちゃん！ 彩子ちゃん！ 放してください！」
建物内部から別の保母と思われる女性の絶叫とも悲鳴ともとれる声が聞こえた。

おそらく彩子ちゃんと呼ばれた園児は犯人の人質のような状況に陥っているのだろうと想像できた。

冴子は今話をしていた保母に「分かりました。あなたはこの子たちを保護しながら園の外に出て待機してください」と指示を出した。そして、腰にある小型無線機でミニパトで待機している宮川に連

絡を入れた。

『こちら入渡。現場内では鉄の凶器を持った不審な男が不法侵入している模様。どうぞ』

『了解。ただちに署から応援を要請する。入渡、ひとまずはミニパトに戻るんだ』

『いいえ。戻りません。事態は一刻を争います』

『おまえ一人の力で何が出来るというんだ！ 戻りなさい！』と怒鳴られる。

『戦います』

職場の上官に対しての一方的な反抗を示すのは初めてであった。

それでも、冴子の心の内で宮川に対する申し訳ないという気持ちと自分を心配してもらえる心遣いに感謝した。

良い上官に巡り会えたという幸運を噛みしめて、冴子は一方的に小型無線機のスイッチを切った。

宮川から戻るように命令されたのは、妥当な指示であることは事実である。

交通部の警官は、凶悪犯罪者に対してまともに取り締まれるほどの装備を所持していない。無謀な行為をする事が決して警察官の任務ではない。なので、冴子の任務は無線連絡を入れた時点で十分果たしていた。

もはや冴子の心を支配しているものは警察官の職務ではなく私情であった。

自分にもしもの事態があったとしても、宮川が署に連絡をしているはずなので、間もなくサイレンを鳴らしてパトカーが到着するはずだ。だが、パトカー到着までの間に幼い子供たちに怪我人が出たならば、冴子自身が奈落の底に落ちたような後悔に苦しめられるのは、自分が一番知っていた。何故ならば、自分自身が傷付けられ、世の中全ての存在が怖くなるほど絶望に追い込まれた経験があったから。

そのヘド口のようにどす黒い想いを園児たちにさせたくなかった。

何としてもここの園児達は守りたかった。

交通部の警察官は前述したとおり危険度が少ない職務のために拳銃は所持していないので、腰にある警棒を持ち、冴子は先ほど保育と園児達が逃げてきた裏口から園内に入っていった。

少子化の影響もあり、さほど広くない園内の雰囲気から察して、すぐに不信人物のいる現場に辿り着けた。

そこは保育園内のホール場であった。

学校であつたならば、体育館で行うような全体集会などを行う場所である。

男は、右手に鉄パイプを持ち、左腕には彩子ちゃんと呼ばれていた女の子を抱えて、まさに保育園という場に相応しくない雰囲気醸し出していた。

窓ガラスがすぐそこで割れている光景を目にしても、そんなことは、もはやどうでもいいと頭から抜けてしまつぐらいの現場だった。

ホール場に取り残された園児の何人かはさきほど男に向かって懇願の絶叫をした保育と共に壁際に追いつめられていて、その一帯は男の鉄パイプの射程範囲内であつたために、逃走しようものならば、男の鉄パイプが襲つてくるかもわからない。

全員一斉に逃走をするにしても、その中にはまだ歩くのも安定感がない園児も何人が含まれていた。

本当は恐怖のあまり泣き出したくて仕方がなかつたはずだ。なのに、声を上げる園児達は一人もない。

園児達は、パパやママまたは先生から叱られるのとは明らかに異質な恐怖であり、泣き出すことで許しを得られるどころか、このモニターのような男からどんな仕打ちを受けるかわからない事は本能的に解釈していた。

周辺から尿の匂いが立ちこめて来た。

まだ数える程しか春夏秋冬を体験していない幼児にとってはお化け屋敷ごっこでも怖がる子は恐怖を覚える。

今、目の前にある現実はそのお化け屋敷とは比べようもない恐怖

である。

ガラスの割れた音が聞こえた時間がこの男が侵入してきた時間だと換算するとそれほど長く監禁されていたわけではないが、尿道が緩んでくるのも園児達にとって本能といふべきかもしれない。

その園児たちの絶望的な輪の中に、身長が低く華奢な保育が一人混じっていた。ちよつと間違えれば中学生ぐらいの子供のようにも見えなくもない体格である。彼女の大人の運動神経ならば、この鉄パイプが襲ってくるかも知れない輪の中から一人抜け出す事は容易と思われた。しかし、あえてそれをせずに、園児達を非力ながらも守ろうとし、助けて欲しいと哀願をしている。

彼女の姿に冴子は心を打たれた。

冴子は、鉄パイプの射程圏内の領域を眺め、今のところ皆に怪我人がない様子である事を確認した。

この園内で立て籠もるつもりなの。それとも単なる幼児溺愛者の愉快犯なの？

冴子の目の前に写るその光景は、脳内の回路が突然暴走してしまったように、彩子ちゃんを左腕に抱える犯人の男に対する憎悪が沸き起こった。もはや一般常識のある人間を演じる事も難しかったかもしれない。この子たちと保育さんを守らなければならぬ使命感と、幼稚溺愛者のように愉快犯でこんな犯行を行った犯人に対して、冴子のこれまでの人生で培った憎しみが増していく。

しかし状況は冴子にとって不利であった。

普通、警察は不信人物を追いつめる時には二人一組になる。

一人が警棒などで威嚇をし、もう一人は小型無線機を使用して状況を実況中継のように署に伝え、必要とあれば応援を要請できる。単純な職務質問の時さえ警察官は二人一組である。

本来ならば、冴子には宮川という頼りになる先輩パートナーがいるのだが、先ほど無線を一方的に切ってしまった。

園児達の起したトラブルであろうと安易に単身突入してしまった、

冴子と宮川が持った先入観が完全に裏目に出てしまった。

もう一度無線を繋げて、宮川と通信することが賢明な判断であることは間違いないのだが、そんなことに気付かないほど、冴子の頭は犯人への憎しみと園児たちを守ることで一杯だった。冷静な判断力が欠如していると言われればそれまでかも知れない。

冴子は男に向かって、警棒を構えて、

「警察よ！ おとなしくその子を放しなさい！」

男はゆっくりとその眼をこちらに向けた。

眼が充血していて、焦点が定まっていけない。こちらからの警告を解釈できたかどうかも定かではないように感じられた。おそらく覚醒剤が何かに犯されているのだろう。

犯人の男の持っている凶器にしている鉄パイプは、おそらく下水道工事に使われるものであると予想できた。容易に錆びないような材質でできていて、見た目からしても重さ五キロ以上はあるであろう。普通ならば両手で持ち上げる重さである。

もしも、こんなものが幼児の頭に振り落とされたならば、頭蓋骨が砕けてしまうぐらいの被害を想定しなければならぬ。

また、それだけ重い鉄パイプを右手に握り続けている犯人の腕力は、たとえ相手が素手であったとしても冴子が格闘して叶う相手ではないことは想像がついた。

婦警一人で対処できる事態ではなかった。署から応援を呼んで、警察官数人で対処するのが賢明な選択である。しかし、凶器は瞬間の一振りで園児を襲うかもしれないので、署からパトカーがいくらかサイレンを鳴らして急いだところで、その凶器が振り下ろされる一瞬のスピードに追いつけるわけがない。

そういう意味で考えると、無謀ともとれる冴子の判断を全面的に否定するわけにはいかない。

冴子をここまで理性を失わせ、犯人に対しての憎悪を膨らませ、無謀な行為に走らせてしまったのには理由があった。

入渡冴子には、今でこそ日高という恋人ができ、婦人警官として暮らしているはいるが、それでもどんなに振り払おうとしても振り払えないおぞましい記憶があり、今でも何気ない一日のうちに何度か悪夢のように甦ることがある。

第二章 記憶

それは入渡冴子が、皆から「サッコ」という愛称で呼ばれていた中学生三年生の時にまで遡る。

それまでの冴子の生き甲斐は、誰よりも速く走ることが生き甲斐であった。

小学校五年生と六年生の時は陸上の女子ハードル走で地区大会を通過し、都大会まで駒を進めた。

長距離のマラソンを走らせても、素晴らしい成績を残した。

その成績から冴子の名が都内の名門校の目に止まり、冴子は名門大学へ付属する女子中学へスポーツ推薦で入学した。

中学入学後も、冴子は陸上に没頭した。

スポーツだけでなく、大して勉強をしなくても授業で学力を吸収してしまう器用さもあり、学業の成績もそこそこ良く両親を失望させることはなかった。

両親からしても真面目で理想的な娘であった。

思春期を陸上スポーツで打ち込んでいたために、冴子の肉体には無駄な贅肉がなく、身体もほっそりとしていて、女の子にしては身長が高く生まれたので、いわゆるファッションモデルのような体格を作り上げた。

また、これは生まれ持ったものなのであるが、容姿も端麗であり、そのまま何かのポスターに掲載されたとしても謙遜がない。

もしも女子校でなく、普通の共学校に入学していたならば、クラス男子生徒の何人かは冴子に中学生の不器用な恋心を寄せていたに違いない。

もともと中学が女子校であるため、そんな男子生徒たちとは隔離されてしまっているのと、冴子自身が誰よりも速く走れるようになりたいという意識が強く、自分が美人であろうとなかろうとそんな意識が入り込む隙間がなかった。

陸上の練習に没頭するあまり、プラトニクな初恋を経験する暇もなかった。

冴子のスポーツの成績は練習に打ち込んだ成果もあり、二千メートルの中距離走では関東大会までに出場した。

学業もそこそこで素行にも問題がない。

学校側は冴子を付属の高校へ授業料の減免での進学を保証してくれた。

冴子は受験勉強も、プラトニクな恋心と同じように経験しなかった。

同じ年齢の人たちが、付属校に進学するための一定水準を満たすため、あるいはさらにレベルの高い高校を受験するために塾などに通い血相を変えて勉強をしている中学三年の時は部活も受験勉強のために夏休みから三年生は参加しなくなる。

もともと受験勉強とは縁のない冴子ならば参加しても差し支えないような気もするが、後輩に運動部特有の上下関係で気を使わせてしまうのは避けたかったので、正直参加しにくかった。

スポーツ枠で推薦された冴子の先輩たちも受験勉強とは三年生の時は一学期までしか部活動に参加しなかった。冴子の所属する陸上部に限らず、この学校には三年生はもう参加してはいけないという特有の空気があったのだ。

それから、まだ中学生の冴子は運動部特有の上下関係と認識しているが、そこには先輩が後輩に理不尽なシゴキを行うような学風ではなく、冴子自身も後輩にそのような仕打ちはしなかった。

もっぱら厳しいのは陸上コーチ専門に雇われた顧問の田島先生から出される練習メニューであり、先輩や後輩たちと一緒に帰宅しながら、田島の陰口を言っていたりした。

冴子の頭にある上下関係とはそんなもので年齢の違う友人程度であり、一般的に言われるような先輩の顔色を窺い、ビクビクしながら活動を行うような風習ではなかった。

厳密に言えば、学校内がそのような風習にはさせなかった。先輩後輩の上下関係がエスカレートしていけば、暴力事件なども起こり得る。

この学校側の判断は、生徒の保護者たちから『これなら安心できる』と賛辞を受けたものだった。三年生を部活には参加させない事についても受験生の気を散らせないためにも必要とのことで保護者から大きな反論はなかった。この学校側の専門のコーチを置いて部活内を監視させ、生徒の上下関係を撤廃させる対応は満場一致で正しい。

しかし、厳しい上下関係に悩まされる事なく陸上競技に没頭できたのは事実であるが、それは冴子自身が体育会系の上下関係にも自分は耐えて来たという錯覚を起こした。

本当は大して傷付く事なく過ごしてきたにもかかわらずにである。

三年生の部活動が終了しても、冴子には練習欲があった。

これまで毎日、疲労で倒れ込むまで走り続けていた身体は、習慣なのか肉体的刺激を求めてしまう。

幸い、冴子の自宅は県境近くにあり、そこには大きな川が流れており、広い土手がある。

中学三年生の時は部活で練習できなくなった代わりに、ここでランニングをするのが学校から帰宅後の日課となっていた。

他の運動部でもここをランニングの練習場に使用することがあった。

高校に進学しても誰よりも速く走りたい。と想いを胸にほとんど毎日土手を走りつづけた。

そして、汗を流して疲れた体を土手に横になりながら、風に揺れる木々を眺めているとまるで名画を見ているような気分させられる。普段は気にも止めないような虫の鳴き声、冴子のすぐそばの地面の上を走る蟻の行列はどこへ向かっているのだろうか？

都会の自然も捨てたものでないと、ここに座っていると感慨深くなる。

もう立ちあがる事も容易でないほど疲れた身体は体力的に動けなくなった分、神経が小さな自然の恵みに敏感になった

この自然を感じる時間も冴子にとって好きな時間であり、日課であった。

本格的冬も終わりに近づいて来たある日の事。

この日の空は積乱雲に覆われていた。冴子は雨が降りそうだからという理由で、ランニングを中止することはしなかった。

視覚で捉えられるほど雨が降っているのならばともかく、微妙な天候により中止してしまうと、そのうち甘い考えが頭を巡るようになり、さらにそれがサボり癖となっていく。

一人で何かに取り組みということは、他人から強制される要素がないだけに、そういうところが部活では味わえない辛さでもあった。仮に雨が降って来たとしても、冴子の愛着しているナイロン製の裏地はポリエステルメッシュが施されている上下のランニングウェアはウインドブレーカーとも呼称するように水分を弾くので、首の後ろ側にあるフードを被せてしまえば十分に雨よけの機能は果た

していた。

そのランニングウェアは黒を基調としており、白い三日月型のポイントがウェアの上下に渡り大きく刻まれたデザインであり、無彩色による変化と統一のバランスが整っており、なかなかセンスが良いと自分でも思う。

特待生での進学が決まった時に、田舎のおばあちゃんが買ってくれたものだ。

「サッコちゃんは、勉強もちゃんとしているし運動も立派。戦の時の立派な武士は威風堂々とした鎧を羽織るものだからね。だからサッコちゃんもこれぐらいのものを着るべきなの」

時代劇の小説を老眼鏡をしながら読んでいる影響もあるのだろうが、文武両道を実践している孫娘が可愛くないわけがない。

冴子も田舎のおばあちゃんの愛情の温もりをそれこそ本当に肌で感じられるプレゼントだった。

そのランニングウェアを着て、肩まで伸びたストレートヘアをゴム紐で結び化粧もしない冴子の姿は、将来は魅力的な女性になるだろうと予感させた。

いつものように土手でのランニングを開始する。

そこにはストップウォッチを持つ者もない。仮に自分でストップウォッチを持って走ったとしても、正確なタイムが記録できるとも思えなかった。

おおよそ三キロ位の距離を自分の持てるスピードと体力の限界まで走り続ける。そして力の限界を感じたところが自分の休む場所になる。

もう進学が近い自分の進学する付属の女子校では、どんな人たちと競い合うのだろうか？と走りながら体だけでなく、心の中までも来年度の自分の目標を胸に刻みながら、前へ前へ前進していた。

もう十分に汗をかいたら、土手の芝生の坂に座り込み、今日は空を見上げた。

秋を彩っていた虫たちは、もう完全に姿を消していた。

汗はまるで水に変化してしまったように冷たく、冴子の下着を内側から濡らしていた。

今朝のニュースで見た天気予報も雨を予測していたと曖昧にはあるが記憶している。いよいよ雲行きが怪しくなってきた。

天気は天気だっただけに辺りには人影が見当たらなかった。

帰りは、自分自身の足の速さとあの雲が雨を降らすまでの時間を競い合おう。

競争相手のいない、タイムキーパーもいない一人だけのランニングというものは切ない。

競う相手がいないので、闘争心の向け所がないのである。しかし、今日は面白い競争相手を見つけた。

まだ、呼吸が激しく息が荒い状況ではあるが、もう少し休んだら何としてもあの雲が降らす雨よりも速く家に辿り着いてやる。

相変わらず周辺に人影がない。

冴子のいる土手の位置から県境の川の向こう側には高層の公団住宅が建ち並び、普段の日ならば小さな子供連れの主婦が、まるで公園のように子供を遊ばせている姿を見かけたものだが、この天気が悪さのためか、そんな姿も見当たらない。

まだ帰り道のハードなランニングを開始するには、十分な体力は回復していないと思う。なのでもう少し待とうと冴子は思った。

その時……。

何かが冴子の髪の毛を掴んだ。

あまりにも突如の出来事すぎて、冴子の思考回路は髪の毛の痛みを感じた直後、恐怖を感じる余裕すらもなかった。恐怖よりも自分に降り注いだ災難を理解する現状の把握に勤めなければならなかった。

掴まれた髪の毛が放された瞬間に、何かが冴子の喉元を締め付ける。毒蛇のように締め付けるそれは悲鳴を上げることがおろか、「苦しい」との一言の声さえを上げること不可能なぐらいに喉元の頸動脈を締め付け、このままでは意識が遠のいてしまうのも時間の問題ではないかとさえ感じられた。

首の苦しみで遠のいていく意識の中ではあつたか、自分を襲う正体突き止めようと必死で目を開け、自分に何が起こったのかの現状把握に努めた。

縁の大きな黒いサングラスをしていて、おそらく中年ぐらいと思われる見知らぬ男が大きな左手を蛇のように冴子の頸動脈を締め付けているのが視認し、固まっていた思考回路は、自分が暴行を受けている結論に辿り着かせ、同時に冴子の脳内の毛細血管の隅々までを恐怖という感情が支配していく。

誰かが助けに来てくれたらどれだけ心強い事か？

ここにお巡りさんがいてくれたら、どんなに心強い事だろうか。

冴子が休憩していた場所が河川が見渡せる土手の堤防の内側であったことが災いした。時折、自動車やトラックの走る音は聞こえたりはするのだが、それらは土手の堤防の外側の道路を走っているために、運転手がこの冴子の危機を発見することは不可能であった。

要するに、堤防という山があり、その山を超えた向こう側には人影はあるが、堤防の山が邪魔をしてそれらの人々の視界を封じている。

蛇のように首に絡まった腕から何とか逃げようにも、冴子の力では到底動かない……。動かないというよりも、冴子の頭の中を支配した恐怖心が、抵抗する勇気を奮い立たせなかった。

考えてみれば、今まで親や教師からも理想的な少女から理想的な学生に成長してきて、きつく叱られることもなかったし、陸上部の上下関係でも先輩達に結局は支えられて来た。

それは言い換えれば、世間の理不尽な恐ろしさを知らないまま育つてきた事を意味し、このような恐怖に対しての免疫力はなかったに等しい。そんな無垢な冴子にとって、今目の前で自分の身体に覆い被さっている男は、背筋が凍るように寒くなり、身の毛のよだつ対象でしかなかった。

もしも目の前のこの得体の知らない狼のような男に抵抗を示したのなら、自分はどんな暴力に遭わされるか？　ここで殺されてしまふのだろうか？

それだけを想像した瞬間、今、現在進行形で進んでいる経験した事のない恐怖がさらに膨張し、それはこの世の終焉を意味するような想像に変わり、その想像を持続することは耐えられなかった。

お願いだからどこかへ立ち去って欲しい！

全身に張りつめていた力を抜いた代わりに、もしも神様が本当に存在するならば、この男から解放されたいと男のサングラス越しのさらに向こう側に見える暗い雨雲の、さらに向こう側にあるはずの太陽に向かって、魂を込めて祈った。

しかし、その魂を込めた祈りは、初めからひび割れていたガラス細工のように脆く崩れ去った。さらに、それは冴子の悪い予感とは全く違う形で現実として襲ってきた。

好きな男子生徒に対して赤面してしまうような純粋な初恋すらも経験したこともなく、同世代の女子中学生と比較したら出遅れているかもしれないが異性を魅力的に感じるという感性さえも持ち合わせていなかった。

性行為をしたら子供が生まれるという知識は学校で教わったが、具体的な実践になるとまったく考えた事がなかった。ましてや男子に性欲があることも。

なので、冴子は自分は暴力のみを受けるのだらうとしか予想し得なかった。

突然、締め付けられている首の力に手加減が加わり、声を出すの

は容易になった。

「お姉さん、おとなしくしているんだよ。後10分もしないうちに家に帰してあげるから。もちろん、ちゃんと靴も返してあげるからね」

男が初めて口を聞いた。意外にも想像していたよりも優しい声だった。

大きなサングラスの内側にはどんな表情が隠されているのだろうか？

冴子の首に押さえられている力は言葉を話す事が可能なほど弱められたので、「本当ですか？」と光明が見えてきた気持ちになり返答した。

恐怖と不安のど真ん中にある冴子の心情にとって、思っていたよりも優しい人なのかもしれないという考えが冴子に隙を生んでしまった。

それは逃亡するチャンスを完全に失わせた。

両親や教育者たちからは純粹で陸上を頑張る女の子という冴子の人間像は、この状況では完全に裏目に出た。

左手で首を押さえつけられ、声を上げるのもままならない状態の冴子に対し、ナイロン製のランニングウェアのズボンの腰の紐がほどかれた。

冴子は本能的な恥辱から、まだ自由の効く両腕と両足で精一杯あがき出したが、首を押さえられている左腕に圧力が加わりがちり頸動脈を絞められ、呼吸さえも難しくなり、先ほど以上に意識が遠のいていくほどの苦しみを味わった。男の左腕は、有無も言わせぬための拷問器具のようだった。

そして間もなく、膣部から太腿にかけて、直に冬の季節の寒さを感じた。

絞められていた首の圧力が弱くなったが、首が固定され続けているために自分自身の下半身に視線を移すことは不可能であった。視界に捉えることのできるものは、男の大きなサングラスと、その後

ろにある黒い雨雲で覆われた空のみであった。

涙が目を濡らしていたのは首を絞められた苦しさだけではない。

男は左手で冴子の首を押さえながら、自由の効く右腕を使い冴子の左足の運動靴の靴紐を解いているのが目で確認する事はできないながらもわかった。

足をバタつかせるような抵抗を見せれば、首を絞められる苦痛が待ち受けているのだろう。

まるで鎖で縛り付けられて拘束されているような状態であり、この状況から逃れられる手段が思い付かないという不安は増大していき、頼れるものは何も存在しないという心理がとてつもない孤独感を呼び起こした。

左足が軽くなった。それは運動靴を脱がされたのを意味した。

運動靴のない冴子の右脚側のランニングウェアと下着が完全に脱がされ、左脚側だけ不完全ながらズボンを履いている状態になった。そして、男は冴子の upper body に被さり、抵抗の意思を示さなかった時と同じぐらいの手加減気味の強さで首を押さえ始めた。

さっきまでは、可能性が少ないながらも誰かが助けしてくれることを望んでいたのだが、今は、誰にも自分のこんな淫らな姿を見せたくないという願望が頭の中を支配していった。いくら男女の性に鈍感だったとは言え、中学三年生にもなれば自尊心はある。それが助けてくれる人だとしても、衣服を脱がされた自分を見られたくはない。

冴子は大きな河川の向こう側の高層住宅街の人たちからも、この光景を見る事など実際は高機能なオペラグラスなどを使用しないと不可能な距離ではあったが、この屈辱的な姿を見られているかもしれないという被害妄想までもが芽生えた。

首が固定されているため、冴子からは自分自身の下半身とその周辺へ視線を移すことは叶わず、そこがどんな状態になっているのか確認するすべはなかった。自分の下半身にどのような状況を待ち受けていることを確認することはできなかった。

突如、それまで押さえられ続けていた首が解放され、冴子の両肩が押さえられた運動靴とズボンを脱がされた左脚を上空に抱え上げられ、冴子は膣部から体内に汚い悪魔が潜入してくるのを感じた。

「うあああつ！ やめて！」

もう声を出さずにはいられなかった。

精一杯に声を上げ、叫んでも誰も聞こえないだろう。

ハンサムな男子生徒にも性的欲求を経験した事のなく、具体的なセックスの実体を知らない冴子にとって、それはあまりにも汚らわしく嗚咽する涙が出るほどの現実であった。

「ううう痛い！ やめて〜！」

自分の体内に侵入してきたそれは、猛毒を含んでいて冴子の肉体を浸食してしまうように思えた。

さっきまでこの男に覚えていた恐怖さえも忘れ、さらに恥も外聞も捨てて、振り絞れるだけの声を上げ、男の行う行為に激しく抵抗を示した。

もうこれ以上こんなことはやめて……。

生まれてから今まで生きて来て、想像もした事もない羞恥心は冴子の脳内をまるでミキサ―にでも掛けたようにグシャグシャになり、正常な思考能力をも奪って行き、そのうち声を上げるにしても白い吐息のようにしかならなかった。

さっきまで微量ながら秘めていた自尊心などは崩壊していた。

そして、冴子を強姦していたこのサングラスの男は自身の満足感を満たしたのか、もっとも冴子からは男性側からの満足感など分かりようもなかったが、冴子を汚いものを捨てるかのように解放し、早歩きで土手の堤防を登って行き、消えていった。

髪の毛を掴まれた時から始った恐怖は過ぎ去った。

解放された瞬間、何よりも初めに片脚だけ完全に脱がされていた下着を着用し、ランニングウェアのズボンを着用した。本能的な羞恥心がそうさせた。また、脱がされた運動靴もすぐそこで見つかった。

た。

幸い、衣服は破れたりしてはしなかったもので、格好だけは来た時と同じ状態になった。

しかし、その恐怖の代わりに残された現実と心の傷は例えようのないほど大きく、まだ身体は震え続けていた。もちろん、その震えは真冬の季節の寒さや太陽が照らされていない天候によるものではない。

放心状態というのはこういう事を言うのだろうか？

何も天変地異は起こっていないけど、地球がひっくり返ってしまったような気がした。さつきまで生きていた世界と、全く別世界に生きているみたい。

涙が次から次へと流れて来て、もうその場から動く気力すらなかった。

目の前で流れている河川をよく見渡せば、マナーのない人たちから捨てられた空き缶や煙草の吸い殻などが藻を吸い付けながら浮かび上がっていた。

今の自分は川に捨てられた空き缶や煙草の吸い殻のようだ。

そういう風に思うと、今の冴子の存在価値さえも否定的になってしまい涙が溢れ続ける。

そして、空を見上げれば、今にも雨を降らせそうなどんよりとした灰色の雲たちが生き物のように空を泳いでいた。

この雲たちはあの光景を見ていたのだろうか？

生物のように見える雲に対して、どこかに隠れてしまいたい気分になった。

だけど、この世に空がある限り隠れる事など無理な話だ。

もう帰らなければと思うのだけど、家で帰りを待っている両親に対してどんな顔をして会えば良いのか？

何か自分がとつもない犯罪を犯してしまつて親に顔を合わせる気分だ。

そう思うと簡単に家に帰ろうとする気持ちを削いだ。

公衆電話から110当番したり、交番に駆け寄り寄る気にもなれなかった。

被害者の立場ではあるのだが、消えてしまうほどの恥ずかしい想いを警察には伝える気にはなれなかった。

警察官だけではなく、両親にさえにもこの出来事を話す勇氣などとても持ち合わせていなかった。

現実の社会問題として警察のレイプ犯罪の検挙率は低い。

その最大の原因は、精神をズタズタにされた被害者が被害届を出すのをためらってしまうために警察は動きようがない。

検挙率が低いというよりも、事件があったことを被害者が警察にも秘密にされてしまうので実体が把握できないというのが現状である。

今の冴子はまさしくそんな状況なのだ。

誰にも話すことが出来ないことは、同時に傷を癒してくれそうな人も皆無であることを意味した。

このまま消えてしまいたい……。

人生をビデオのように巻き戻すことができたら、どれだけ幸せか？ 相変わらず涙は頬を流れていた。その冴子の涙と同調したように、突然、ポタポタと雨が落ちてきた。

あの恥ずかしい光景を見ていた雲さんたちも涙を流してくれていた。冴子は、雲さんたちが今の自分に同情して涙を流しているくれているような気がして、仲間を得た気持ちになれて嬉しかった。

その雨が絶望のどん底から這い上がるための小さな隙間だった。さっきまでは雨が降るまでには走って何とか家に辿り着くことを考えていたにもかかわらず、唯一自分を見守っていた雲さんからの贈り物の雨に感謝した。

雨は次第に強さを増していき、本格的な大降りになった。

冴子はあえて雨よけはせずに、目を閉じて顔を空に向け、大粒の雨を全身に受けた。こうしていれば流れ続ける涙でグシャグシャな顔を洗い流してくれる。

それは雲さんからの『もう泣かないで』というメッセージに思え、さらにあの忌まわしい出来事も洗い流してくれそんな気がした。

どうか今日の全てを洗い流して欲しい……。

冴子は全身をあえて雨に晒し、ずぶ濡れになりながら雲さんからの贈り物に温かさを感じた。それは絶望の淵から立ち上がるための松葉杖をプレゼントしてくれた気分であった。もちろん、それは物理的に存在しているプレゼントではないのだが、誕生日やクリスマスに貰うプレゼントよりも重い贈り物であった。

そして、皮肉にもおばあちゃんがプレゼントしてくれ、それまでお気に入りであったこのランニングウェアは、あのサングラスの男の持つ全てを吸収してしまった気がして、嫌悪の対象としかならぬいプレゼントに変わった。

それまでは恐怖の余韻でぞくぞくと震え続けていた背中が、この雨のおかげで恐怖でなく単なる寒さによるものに代わったような気にさせてくれた。

恐怖ではなく単なる気候的な寒さの震え。

おそらく、この唐突な雨に遭遇してしまい、今の冴子と同じ寒さを体感している人は世の中にたくさんいるはずだ。そう思うと自分も絶望ではなく、単に大雨に遭遇しただけの不運を感じているだけであると、強姦された不幸のベクトルがプラスの方向へと思考が流れていった。

自分だけがこの寒さに晒されているのではなく、関東近郊に住む人はみんなこの寒さを感じている。自分と同じような人がたくさんいる……。

偶然の産物ではあるが、雨に打たれているのは、世の中のみんなと同じという事実が、自分も相対的にみんなと同じという思いにさせ、さらにそれは冴子の幸福度を押し上げ、絶望から立ち上がるた

めの最初のエネルギーとなった。

そしてもう一つの幸運な偶然。

中学二年生の時に学校の授業で教わったこと。

処女膜が破れると出血をする事、そして運動をする女子生徒は処女膜が破れてしまう可能性があるということ。陸上部で活躍していた冴子は、（もしかしたら自分の処女膜は破れているかもしれない）と、教壇の先生の話を流し聞きしながら考えた記憶を思い出した。

結果、陸上選手で走り続けた冴子の処女膜は、予想通り破れていたようだ。血が出た痕跡など全くなかった。

恋愛に鈍感な冴子にも、女子の処女の重さは知っていた。確か電車の中で何かの小説で読んだ。生涯を共にする人に捧げるものということを。

わたしの操はアイツに奪われたのではない。陸上に捧げただ。

絶望の中から、細い糸を手繰り寄せるようにして、今の自分の置かれた状況下の小さな出来事すらもプラス思考に出来る要素を探していた。

この大雨と陸上部での練習で処女膜が破れていた事実。この二つの現実が、「絶望」と「微かな希望」のボーダーがあるならば、「微かな希望」の方にグラフは上がった。

降り注ぐ雨は、強い風を伴い始めて横殴りになり、さらに強さを増した。雨が地面を叩き付ける音と河川を叩き付ける音は、もはや普通の会話程度の音ならばかき消してしまうと思われぐらいの豪雨に発展した。

冴子はその雨を全身にまともに受け、大粒の雨の一粒一粒が身体を打ち当たる感触は、『入道。頑張れよ』と肩をポンツと叩かれるような感触に似ていると思った。考えてみれば、陸上の大きな大会で、さあこれから自分の出番だという時には、必ずコーチや先輩達がこんな風に肩や背中を叩いてくれた。それがどれだけスタート前

のプレッシャーを和らげてくれたことか。今はこの雨が、それも断続的に私を励ましてくれている……。

冴子は、風の強い豪雨が降る真冬という気候にもかかわらず、ラニンングウェアが引きちぎれそうになるまで腕をまくり、上腕までをこの雨に晒してその恵みを受けた。

確か去年の今頃は、真冬なのにこうして半袖になってみんなで走ったんだっけな。

鬼コーチの田島が温かそうなセーターの上にさらにジャンパーを着ながら、「寒ければ走れ！ ダツシユだ。ダツシユ！ 寒いと言った奴にはさらに別メニユード！」と部員たちに対して大声で煽っていた、去年のちょうど今頃を昔のように思い出した。

腕をまくっていたら、恐怖と恥辱による悪寒ではなく、本当に寒くなってきた。

「そうだ。ダツシユだ！ ダツシユ！」

冴子はそう声に出し、自分に言い聞かせ立ち上がった。豪雨に散々浴びた顔は、もう自分でも泣いているのかどうかわからない状況になっていた。まさしく雲さんからの『もう泣かないで』というプレゼントであった。

そして、家に向かう道のりを降り続ける雨の中を全力で走った。全力で走れば走るほど傷付いた心を癒してくれる気がした。

道に大きな水たまりがあっても、やけくそのように踏んづけて、ピチャリと水を跳ねながらその上を走った。途中で速度を緩めてしまえば、また傷付いたどん底の気分に戻ってしまいそうに思えて、白い息を吐きながら乱れる呼吸とは裏腹に、怖くて速度を緩めることができなかった。

極限まで追いつめるような肉体的疲労は、傷付いた事を考えさせる余裕を失わせ、冴子を精神的に傷付いていない状態にさせた。

冴子が、父の徳幸と母の麻衣子と住む十階建てのマンションが近くなってくると、そこは住宅街であるために、もしかしたら近所の

人、小学生の頃はクラスメイトだった保護者といった顔見知りと遭遇する可能性が増す。近所でも陸上を頑張る子として評判だったのでランニングウェアを着て走る姿に違和感を覚える人たちはいないはずである。

しかし、今の冴子にとって、こんな姿を誰にも見られたくないという思いが心を占めていた。もう終わってしまった事ではあるが、未だに自分が淫らな姿に晒されているような錯覚さえも覚え、人目に付かないことを心より祈っていた。

そんな祈りが通じたのか？

豪雨が彼らに外出を避けさせたのだろうか？

もしも豪雨が原因で誰にも遭遇せずに済んだのなら、雲さんに感謝しなければ。

とにかく、幸運にも冴子は誰にも人目に付かず、マンションのエレベーターを上がり、七階の自宅のドアの前まで戻ることができた。

家のドアは鍵が掛けられていた。

母親の麻衣子は看護婦をしており、まだ帰宅していないはず。

鍵はズボンのポケットの中に入っているはずだが、ズボンを脱がされた時のゴタゴタで鍵を紛失していないか冷や汗が出るような不安が襲った。冴子にとって鍵や金銭を紛失する事態よりもこの姿を母親に見られてしまう事態の方が不安が大きかった。

ズボンの複数のポケットからは雨をたくさん吸い込んでしまったハンカチ。初めから中身は少ないながらも財布もあった。そして、雨に濡れてその質感をいつもより光らせている鍵が見つかった。物品類で失ったものは何もなかったが、今の冴子にとって鍵以外のものは無くしていてもそんな物はどうでもよかった。

家に入ると即座に、サングラス男のドロリとした嫌悪感をたくさん吸い込んでしまった黒と白のランニングウェアをTシャツを脱ぎブラジャーを力一杯に剥ぎ取った。ブラジャーはホックの辺りから破り、それはもう着用することはできなくなった。

そして、全裸になると風呂場に急ぎシャワーを浴びた。それは今日一日の出来事全てを浄化するための儀式のつもりではあったが、懺悔のような感覚しか湧かなかった。

いつもよりもシャワーの温度を上げてみるが、やはりどんなに洗っても洗っても身体中の至る所にこびり付いているようで、傷付いた心は癒せない。

今日の事は家族にも友達にも先生にも絶対に知られてはならない。もしも誰かに話せば自分が自分でいられなくなりそう……。

熱いシャワーを浴びながら、恐怖、恥辱、憎しみ、悲しみなど列挙しきれない感情の固まりのような汚物は喉元まで出かかっていた。そんな冴子の心理状態では、やはり物事を冷静に考える力をも失わせていた。

突如、熱いシャワーまでもが冷たくなったような気がした。

もしも生理が来なかつたら、どうすればいいの……。

容易に想像が付きそうな事であるが、恐怖を、恥辱を、憎しみを、怒りを、それら全てを押さえるのに精一杯だった冴子の頭に懐妊の可能性を考える余裕などなかつた。もしも自分のお腹が膨らんで来るようになったら、当然、両親に隠し切れるわけがない。

どうすればいいの？

もう身も心も崩れそうだ。誰も頼りになる人間がいけないという孤独感を実感し、もう自制心さえも押さえられなくなったのと居ても立ってもいられない気持ちが入り交じった。

シャワーなんて浴びている暇なんてない。

お風呂場から出ると、冴子は急いでパジャマを着た。

そして、鏡を覗いた。

絞められた首には軽い打撲のような痛みは残っていたが、傷跡のような痕は残っていなかった。そこにはいつもと変わらぬ自分自身が映し出されていただけだった。

それでも、あの大きなサングラス男の身体から発せられた全てを、抹消しなければ気持ちが押さえられなかった。それは決して生理が

来るといふような保証はなく、具体的な解決にはならない事を冴子は認識していたが、そこまで感情を制御できなかった。

家に着いた時に、真っ先に脱ぎ捨てた白と黒のランニングウェア。おばあちゃんが、立派な武士に相応しいようにと買ってくれた物だ。しかし、今はもうサングラス男の体臭を吸収し、亡霊のように悪魔が取り憑いているようにしか思えない。

まだ母親は帰って来る時間でないことを確認すると、冴子は台所のガスコンロに火を点火すると、まずはズボンの方から、ガスコンロ上を燃える火に近づけた。裏地のポリエステル部分は本当に燃え上がるような気がしたので、決して直火には当てなかった。ナイロンの合成樹脂が燃える異臭が辺りに立ち込めた。そして、今度は上着を同様な要領で火に近付けた。

上下を合わせて人型をしたその物体は、江戸時代まで行われていた火あぶりの刑された処刑人の哀れな姿を連想させるような無惨な姿になった。また、それは懐妊しないように願う霊能的な儀式のようでもあった。

冴子は部屋にある電気ストーブの温度を最大限までに上げて、所々が溶けかけた無惨な上下のナイロンを、主に火で焙った部分を加熱部分に触れるように置いた。

そして、シャワーを浴びる時に脱いだTシャツとブラジャーとパンツを台所にある生ゴミの入ったゴミ箱のゴミ袋に入れて、そのゴミ袋を縛った。さらに新しいゴミ袋をゴミ箱にセットした。

冴子はパジャマのままマンションの一階までエレベーターで降りていき、所定のゴミ捨て場へと急いだ。相変わらず雨は降り続けている中を小走りで急ぎ、ゴミ捨ての指定日でないにもかかわらず、その下着類全てが入ったゴミ袋を投棄して、再び家に戻った。

そして、鏡を眺めた。

暴行を受けた部分に人目に付く打撲痕はなく、首を絞められた部分も目立つような後は見当たらない。これならば、家族や学校でも異変に気付く者もないだろう。

母の麻衣子が帰ってくると、家の中が異常な空気に包まれていることに気付いた。プラスチックを燃やしたような臭いがするのにすぐに気付いた。さらに部屋の異様な高温さにも気付いた。

「サツコ。どうしたの！この臭いは？」

一人娘のだらしなさぶりに対しやはり苛立ちを表に出した。

さらにストーブの前に放置されているように見えるランニングウェアを見るなり、

「あなた！ 火事にでもなったらどうするつもりなの！」

さすがに声を荒げた。

「ごめんなさい……」

こんな言葉しか冴子には見当たらない。

全ては冴子が高価なランニングウェアを家族に対してガスコンロで焼いた事を隠すために意図的に施したカモフラージュであったのだが、改めてそれを見てみるとストーブの熱で本当に火事にでもなりかねてもおかしくなかった。冴子ガスコンロの火に近付けた時よりも、生地の溶け具合が増していた。

だが、もしも本当に火事になってしまっても、今の冴子の心理では罪悪感が入り込むスペースなどなかったかもしれない。

母親の麻衣子は険しい表情で娘の冴子を見つめた。

だが、すぐにいつも見合わせている娘の顔の血色が、いつもと違うのを感じて、その険しい表情を緩めざる得なかった。そして、冴子の腕を取り、自分の方へ手繰り寄せて、冴子の額に手を当てた。

冴子が生まれるよりも前から看護婦を勤めていた麻衣子を感じたものは、

この子、発熱しているかも。

という看護のプロの感触だった。

「あなた。お熱、計って見なさい。」

その母の言葉を聞くまで麻衣子の心理を計りかねていた冴子は、強姦された事をこつと簡単に見破られたのかとドキリとさせられて

いた。麻衣子の気遣いのせいで、さらに顔から血の気が引いていたと思う。

看護婦の職業柄なのか、病院の患者のように具合の悪そうな娘に對して、麻衣子には、もったいない事をされ、さらに火事になりかねない失態を厳しく叱ることはできなかった。麻衣子は柵にある救急箱から体温計を取り出し冴子に差し出した。

冴子は検温をしながら、（まったく、しょうがないんだから。）という表情でナイロン部分が熱で溶けたランニングウェアをゴミ袋の中に捨てている麻衣子を見つめ、この事態に優しく接してくれる母親に愛情を感じた。

素人の目から見ても、それはストーブだけで燃えた物ではないと容易に判別できるであろうが、とにかく麻衣子はそのような事を全く不審がらず、ランニングウェアを処分してくれた。

体温計のデジタルの数字は三十八度を超えていた。

麻衣子はその数字を確認すると、体温計と同じ救急箱に入っていたバファリン一錠を渡し、あのガスコンロの隣にある水道の浄水器からコップに水を汲んできた。

「仕方ないわね。今日はこれを飲んでゆっくり寝ていなさい」

冴子は麻衣子から言われるままにバファリンを飲んで、ベッドに横になった。

あれだけの雨に打たれれば、発熱していても不思議ではない。だけれど、その発熱は看護婦の母親をいつもより優しい人にしてくれたし、ドタバタしたので、ガスコンロ付近の悪臭や台所の生ゴミのゴミ袋が新しくなっていることも気付かない様子だった。まして、帰宅の遅い父親の徳幸が、下着が無くなっている事に気付く可能性など皆無である。

これで恐怖と恥辱と憎悪が染みついた衣服を家族に気付かれることなく全て消し去る事に成功した。もしも後になって、麻衣子が洗濯を干している時などに、今日の下着類が無くなっている事に勘付いたとしても、適当な言い訳などいくらでも思い付く。

また、この発熱の効果は、今日の恐怖の出来事を、改めて思い出して傷付く余裕もなく眠りに就かせてくれた。

これも雲さんからの贈り物と感謝せねばならなかった。

翌日、冴子が目を覚ました時、時計は昼の十二時を回っていた。

麻衣子がいつものように仕事に出かけている様子なので、学校へ欠席の連絡はしてくれたのだろう。そうでもなければ、こんな時間まで寝かせてもらえるはずがない。

案の定、ダイニング部屋のテーブルの上には、麻衣子の筆跡のメモが置いてあり、

『学校にはお休みをすると連絡をしたから。今日はゆっくり寝ていなさい。それと、冷蔵庫にポカリスエットとオレンジジュースがあるのと、菓子パンを適当に買っておいたから、それも食べなさい。そして今日は安静にしていること』
と書かれていた。

メモに書かれていた母親の心遣いはありがたかった。だが、冴子にはメモに書かれた内容を従順にこなすよりも、不安で不安でどうしようもない感情が興奮を呼び起こし、安静にしていることなどできなかつたし、なおさら眠りに就くことなど無理だった。

また、安静にしているということは、それだけで無意識に様々な事を考えてしまう要因になり、昨日の悪夢の出来事を、それに取り憑かれてしまったみたいに思い返してしまいそうで、病人という身であるけれど、とにかくじっとしているのさえ怖かった。

自分が強姦されてしまったという事実。これだけは家族にも、仲の良い友人にも、先生にも隠したかった。このことが周囲の人間に明るみに出るぐらいならば、万引きでもして補導され、特待生の進学が取り消されてしまった方が冴子にとって幸せだった。もちろん、両親からも先生からも真面目な子と言われて育ってきた冴子には、万引きなどのような世間を外れる行為をする勇氣などなかったが、

これは冴子の完全な被害妄想であるのだが、明るみになるならば、

自分はさらし首にでもなつてしまい、周囲の人間達から迫害されるような非難の眼を注がれてしまうと無意識ながらも勝手に思い込んでいた。

衣類の処分はうまく成功したものの、まだ、妊娠の可能性という最も厄介な問題を抱えている事に冴子は改めて現実に怯えた。この問題を解決するのは、衣服を処分するのは違い、自身の身体のものでありながら冴子個人の力ではどうにもならない。

悪魔の子供が私のお腹の中に宿るかもしれない……。

そう考えるだけで、張り裂けそうな不安は増幅されて行く。もしも妊娠してしまったならば、胎児を墮ろさなければならぬのだが、その場合、否応なしに両親に強姦された事実を報告せねばならない。もちろん両親は被害者の立場の冴子に対して同情して味方になってくれるはずであるが、まだ若すぎる冴子には両親からも軽蔑されるといふ認識が先に立った。スタスタにされ、松葉杖を付きながら辛うじて立ち上がっている自尊心の中では、正常な判断というのは困難だった。

これまでの人生で経験したことのない絶望に直面しているのではあるが、もう傷付いて泣き崩れているのも疲れていた。

母親が残したメモにもう一度目を通した。一人で抱え込んでしまった絶望の世界から現実の世界に引き戻された。

冴子は母親のメモ書きに書いてあった菓子パンを口に含みながら、果汁100パーセントのオレンジジュースで飲み干した。味なんてどうでも良かった。昨日の発熱はまだ残っているのかもしれないが、食べるだけの食欲はあると認識させてくれた。

勉強を長時間持続させるだけの集中力が続かないのと同様に、自分の身に降り注いだ不幸を継続的に落ち込み続けているのも難しいと言えは難しい。やはりどこかで冷静になつて事態を考えるゆとりが生まれる。

今の自分は何をするべきなのだろうか？

その結論は容易に考えついた。今の自分の体の状態の持つ可能性

をもつと知るべき。それが理解できていなければ、これから妊娠するにしろ、そうでないにしろ、どのように悩めば良いのかも分からない。とにかく今のままでは、冴子の心理は、オアシスの方向も分からないまま、砂漠にポツンと取り残されているような状態である。その悩む方向性を示唆するヒントは、中学校の保健体育と家庭科の教科書には載っていない。ならば図書館に行けばいい。

冴子は母親からのメモ書きの半分を無視する事に決めた。パジャマ姿からトレーナーの上に厚手でトータルネックの茶色のセーターを着て、下はジーンズの姿になった。さらに昨夜、バファリンと体温計が入っていた救急箱の中から風邪マスクを取り出し、それを用いた。これならば学校を休んで昼間に行動していても不審がられないはず。

看護婦の母親が揃えているだけあって、救急箱の中身はとても充実している。念のためにバファリンは飲んだが、体温計での検温はしなかった。検温中に待っている数分間にいるんな思いが頭の中を巡って来るのが怖かったから。

玄関先で靴を履こうとした時、昨日履いていた運動靴が、水気を含んで、豪雨に濡れた余韻を残したまま、玄関に置かれていた。その運動靴の水気を含みが、昨日の出来事が夢ではなく現実であったことを冴子は改めて認識させ、心にズシリと突き刺さった。さらにその靴の色彩も、燃えかすになったランニングウェアと似たような白を基調として黒のラインの物だった。陸上の地区を代表する選手である冴子は、運動靴をたくさん所有していたので、購入する時とはもかく、履き慣れた頃になると普段それらのデザインなど意識した事がなかったのだが、あのランニングウェアと同じ、黒と白の無彩色の対極同士が織り成す色彩は、じめじめした感覚を思い起こし、心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

これも捨ててしまわないと……。

それを捨てたとしても、事態が根本的に解決される問題など何もないと冴子は十分に理解していた。もしも物を粗末にするなど非難

する人間が現れたとしても、単なるきれいな事にしか聞こえない。第一にそんなきれいな事を言う人間に今の自分の気持ちなど理解できるわけがないと勝手な理屈をつけた。幸いにも、それは踵の部分はずいぶん磨り減っていて、一足の運動靴としては寿命を終えてもおかしくなく、潮時な物でもあった。なので母親の麻衣子に対する言い訳に困る事はないと思う。

冴子はまだ存分に湿り気の残るその運動靴を手に取り、燃えないゴミのゴミ袋へ捨てようとした。そのゴミ袋には、他の燃えないゴミに混じって、あの惨めな姿のランニングウェアも捨てられていた。その同じゴミ袋の中に運動靴を乱暴に入れ、適度の量になったゴミ袋を悪夢と憎悪を封印するかの如く、口をきつく縛り付けた。たとえ、カラスや野良猫、ネズミの類であってもこのゴミ袋を荒らされるのは、封じ込めたオーラが外に出してしまうので耐えられなかった。それらの生物にゴミ袋の側面を破られてしまえば元も子もないのだが、きつく縛らなければ気が済まなかった。

『安静にしていなさい』という母親のメモ書きの拘束を絶つ事は容易である。冴子は以前まで少しの間だけ愛用していた運動靴を履いて、全てを封印したつもりのゴミ袋を片手に持ち、自宅のドアノブを内側から開け、マンション七階の廊下に出て、鍵を掛けた。

鍵を掛け終えた瞬間に、メモ書きという形であれ冴子を守ってくれる家庭と、何が潜んでいるか分からない外の世界との境界の出入り口がロックされた。

冴子はマンションの廊下から空を見上げた。昨日の風雨は雲を遠くへ飛ばしてしまったのだらう。空は綺麗なほど真っ青だった。

もう私の味方になってくれる雲さんはいない。

冴子は自宅のドアから外に出て、予想してなかった強い孤独感を感じた。小学校に入学する以前に、怖くて一人で留守番ができなかったことを思い出した。あんな感じの孤独感を、この歳になって感じている。

そして、マンションの七階から首を乗り出し、真下の地上を見下

るした。もう長く両親とここに住んでいるので、高所から真下を見下ろす事に対して免疫力があった。マンション七階程度の高さでは、冴子にとって高所とは言えない。が。

ここから飛び降りれば死ねるだろうか？

もしも妊娠してしまつたら仮定ではあるが、そんな事まで考えるようになっていた。

だけど、自分のマンションで私が死んだら、お父さんとお母さんに迷惑が掛かるから、この場所じゃ死ねないな。

自分の命を自分自身で絶つ事に対して、具体的な計画性までも練ろうと頭が考えてしまう。

フツと我に返り、自分が作文でも書くかのように無意識のうちに死へのシナリオを描いてしまっている事に気付く。それは空想の世界でも何でもなく、現実の世界である事が重くのし掛かる。

マンションの七階の廊下から青空を見上げながら、自分の哀れさが身に滲みて、涙が頬を伝わった。

こんな事を考えるのは、まだ早すぎる。自分には調べなければならぬ事がある。

まだ妊娠してしまつたと断定されたわけではないという事実が何とか冴子の墮落していく心を支えていた。

相変わらず涙を流しながら、マンションの指定されたゴミ捨て場にランニングウェアと運動靴の入ったゴミ袋を破棄して、マンションの駐輪場に向かった。

図書館までは自転車で十五分程の距離である。風邪マスクをしているので、本来は学校にいけない時間帯であっても、不審がられる事はないはずだ。

冴子は自転車を漕ぎ出し、マンションの敷地内から外に出ると、まるで野生のジャングルのような異世界であった。見知らぬ男の人と歩道ですれ違っただけでも、まるで自分がライオンや虎から狙われる草食動物にでもなったようになってしまった気分させられた。一人、また一人とすれ違っ度に命からがら逃れられたような安堵感で胸を撫

で下ろすという繰り返しだった。それほどまでにあの悪夢の出来事は冴子の世界観、世の中に対する見方を激動させていた。

自転車のペダルを漕ぎ、神経を磨り減らしながら、何とか図書館に辿り着いた。

そして、主に妊婦が読む産婦人科の医師が書いたような本が羅列している書棚を探した。何冊かの本を手に取り、図書館の勉強机で、それらのページを捲る。

妊娠というものを、絶望の代名詞に位置づけている冴子にとって、それらは医学的な内容が書かれているに過ぎないのだが、やはり不快な内容であり、腰を据えてじっくり読むのは酷であった。

それでも、ここには自分の運命を決める事が書いてあると心に決め、月経についての項目と妊娠の初期についての項目だけは知識に詰め込んだ。

月経が規則的に来なくなる『月経不順』という病気があること。そして、妊娠をした比較的初期に『つわり』という吐き気やムカムカを伴う症状を妊婦の八割ぐらいが経験していること。

生理がやって来なかったとしても、それが必ずしも妊娠を意味しているとは限らないことを知った。それ以上の知識については、自分自身の悲しい現実が書かれているようで読み続けることはできなかった。

もしも生理が来なくなってしまうたら、月経不順かもしれないと母親に相談して、産婦人科で診てもらおうしかない。

以上がこの事態に対する冴子の導き出した結論であった。中学生が妊婦向けの本を読んでいるのは、図書館員に不審がられるかもしれないので、長時間滞在しているのは避けたかったし、図書館員に対してでさえも草食動物になったような警戒心がないわけではなかった。

図書館を出ようとした瞬間、来る時には全く気付かなかったが、壁に影絵が額縁にはめられて飾られていた。影絵なのでそれを織り成す色彩は、当然、黒と白。

あのランニングウェアと運動靴に染み込んだ悪夢の記憶をリアルに連想させ、思い出したくもない出来事を否応なしに脳裏に呼び起こさせる。

衣服は捨ててしまえば、消し去るのは簡単であるが、日常生活で否応なしに見かけてしまう色彩に関しては、心理的にも対処しようがなかった。

冴子は自分の血の気が引くのを感じ、悲鳴を上げてしまいたい衝動に駆られた。

足早に図書館から出て、駐輪場にある自分の自転車のサドルを枕のようにして、中腰になるような不安定な状態で顔を埋めた。風邪マスク越しに呼吸は荒くなっていた。

そのようにして、しばらく黒と白の色彩を見てしまった興奮を抑えた。

いつまでもそうしていたという気持ちはあったが、家路に着かないわけにはいかないと理性がかるうじて冴子を自転車に乗せ、マンションに戻らせた。

図書館から家に戻ると、母の広告紙の裏側に黒のボールペンで書かれたメモ書きを読み返した。白い紙に黒で書かれたものに対しては、拒絶反応が出ないのは大きな救いであった。白い紙に黒で書かれた文字が読めないとなると、どう頑張っても日常生活に差し障る。メモ書きの通り、病人らしくベッドに横たわるぐらいしかすることがなかった。しかし、ベッドに横たわっては見たものの、頭の中を巡るのは、（月経不順ではなく、本当に生理が来なかったらどうしよう）という不安と、図書館に行っただけで、世の中というのがこれほど怖い存在に感じるようになってしまった不安が入り乱れて、到底眠れそうにない。

眠る代わりに、また涙が流れた。両親が不在で誰も居ないマンションの部屋で冴子は声を出して泣いた。今の冴子にとってそうする事が、自分の不幸に抵抗する唯一の手段する手段に思われた。

冴子は時計を見て、時間を確認した。

お母さんが帰ってくるまで、まだ時間がある。

誰にも知られたくないから、両親の前でさえも平静を装わなければならぬ。だけど、まだ時間は十分にある。それまではこのまま泣き続けていよう。

母親の麻衣子が帰宅して、玄関先で靴を脱いでいるところを冴子は、笑顔で「お帰りなさい」と出迎えた。だが、その笑顔の裏に隠されているものは、涙が枯れ果てるのではないかと思うほど泣き続け、これでもかと顔を一生懸命に洗って、作り上げたものであった。そのような裏側を察しているはずがないと冴子は、根拠のない確信を抱くしかない。

昨日と同じように、麻衣子から救急箱から体温計を差し出され、検温を試みるように促される。

発熱していた時の身体の倦怠感は収まっていたと感じる。冴子としては取り残された家で安静にしていると、傷付いた心を刺激してしまい、それにもう耐えられなかった。明日は学校に行きたかった。

冴子の予期して期待した通り、体温は平熱だった。

「よし。大丈夫そうね。これなら明日から学校に行きなさいね」と麻衣子は言う。

翌朝も晴れていた。

家族三人で席を揃える朝食は、冴子の裏側を感じさせないいつもと雰囲気は全く変わらなかった。

校章付きの学校指定の制服を着た冴子は、登校の時間より若干早い父親の徳幸の出勤の時間に合わせて家を出た。

私立の中学なので電車通勤を強いられる。

この恐ろしい世間で一人になりたくなかった。少なくとも最寄り駅までは父親に守られていたかった。

父親と駅で別れ、通学する電車に乗り学校に登校する時は、世間

の怖さに混じり、まるで初めて登校するような緊張感を強いられたが、いざ学校に着いてみると、学校という領域は恐ろしい世間から隔離されているように感じさせてくれた。女子校であったのが幸いしていたのと、見知らぬ人は誰もいないという思いが冴子に安心感を与えた。

授業中は、あの悪夢の出来事とそこから妊娠しているかもしれないという事を、努力は強いられしたが、思い出さないようにした。また、級友ともサツコと呼ばれながら、たわいのない会話をして、平静を装って過ごす事ができた。

学校という領域は、外の世界を歩くような草食動物のような緊張感を強いられずに済んだ。

下校時刻。

いつもの冴子ならば、このまま帰宅するのだが、家に帰ってもあの事を思い出し、一人で泣き続けるだけという状況は目に見えていた。

冴子は職員室まで行き、陸上部のコーチの田島利彦に相談した。

角刈り頭に色黒で、脳味噌の何割かの成分は筋肉で構成されているのではないかと、と思わせるごっつい男。コーチという名目で雇われているが、体育の教員免許は所有しているそうだ。しかし、そんな男でも今の冴子の世界では、数少ない恐怖を感じさせない男性の一人である。

「今日から卒業まで自分も練習に参加させて欲しいのですが？」

「なんだ？ 突然に」

田島としては返答に困る相談であった。練習熱心な生徒はもちろん大歓迎ではあるのだが、三年生は一学期で部活動をしないというこの学校の風習が返答の邪魔をした。

「家に帰っても暇ですし、それにもう卒業も近いですし、高校に入学した時に、練習に着いていける基礎体力を養っておきたいのです」

冴子としては練習参加へ漕ぎ着けるための言い訳であったが、その言い訳は真面目で練習熱心な生徒と田島に改めて印象づけるに十

分だった。

「ちよつと待つてろ」

田島にとつてみれば、練習参加は風習であるが、校内の厳肅な規則ではないので、田島も揺れる所である。

田島と一緒に冴子は教頭先生の机まで行き、部活への参加をお願いした。

教頭から、「もう進学先が決定している生徒がほとんどの時期なので、三年生の部活動参加に何の問題ありませんよ」との返事を頂く。

「よし！　すぐに体育着に替えて来い。その代わり練習は容赦しないからな」

と濁声で冴子に活を入れる。

「ありがとうございます」

容赦ない練習は冴子にとって大歓迎であつた。もつとも、そうでなければ困るのだ。あの悪夢の日に豪雨の中で全力で走って感じた、嫌な事を考える余裕がない肉体的疲労が、学校という安全なテリトリーで得られるのだから。

冴子は今まで『誰よりも速く走りたい』という一心で陸上部に取り組んできたが、今では『悪夢の出来事を払拭するために速く走りたい』という願いの実現のために陸上に取り組む部員に変身していた。

陸上部鬼コーチの俺の居場所が完全に奪われたな。こりゃ。

陸上部コーチの田島はパイプ椅子に座りながら、後輩達を率いてグラウンドを走り回る入渡を眺めながらそう思った。

事の発端は、準備運動が終わった時、部員達が日課にしている練習メニューに対して、今日、突然参加を希望した入渡が横やりを入れてきた。

「私には、もつとハードをお願いします。」

田島の顧問生活でこんな事を言う部員は初めてだった。部員から

影で鬼コーチと言われているのも知っている。入部したての新学期の一年生は、涙を流しながら練習に付いてきてるほどだ。

それほど厳しい練習メニューで、汗と涙の結晶を引き換えにして、関東大会にまで駒を進める部員も輩出している。

田島は入渡からの要望に対する返答に悩んでしまったが、

「おまえだけ三年だからな。好きにやってよし。ただし、もしもチンタラしてたら、みんなの邪魔だから帰ってもらうぞ」

入渡という生徒に限って、他の部員の練習の足を引っ張る事はないだろうという確信が田島にはあったが、建前上、厳しく釘を刺しておいた。

入渡自身による個人の練習。それは田島を啞然とさせるものだった。

例えば、百メートルダッシュ五本。それは直線百メートルを全力疾走して、三十秒の小休憩を入れて再び来たコースを同じように全力で戻ってくるというメニューである。

この練習に対して、入渡は小休憩を挟まずUターンをし、丁度、往復して二百メートル走って、小休憩を入れ、合計で十本走った。

鬼コーチの課す練習を小馬鹿にするように走り続ける入渡に対し、田島には、立派に成長した教え子を称える感情が芽生え始めた。

「よしつ。みんな入渡の練習に付いていける根性を見せる。入渡に続け！」

田島は陸上部員全員にそう叫んでしまった。こうして陸上部という鬼の田島帝国が崩壊し、田島本人はパイプ椅子に座り、部員たちの練習を見守るだけだった。

いつもよりもハードになった練習は、当然、入渡以外の部員たちにとって過酷さを増し、田島の予想通り、泣きを入れてしまう者も出てきた。

しかし、入渡は、自身も体力的余裕はないはずなのに、そんな後輩部員たちへちゃんとフォローを忘れなかった。まさしく田島の出る幕はない。

入渡の奴、俺よりも優秀なコーチしてやがる……。まるで俺が学ばなければいけない立場だな。それにしてもアイツももう卒業してしまうんだな。あと一年ぐらい陸上を通じて、一緒に交流したかったけれど、こればかりはどうしようもないか。時の流れって奴だからな。入渡。高校に進学しても頑張れ、応援してるぞ……。

田島がコーチである自分をも超えていく入渡に対する様々な想いを巡らし、しみじみとしていると、部員達の肉体的疲労が危険信号を示しているのに気付いた。過度の練習は怪我や脱水症状の原因にもなりかねない。

田島はパイプ椅子から立ち上がると、全員に集合の声を掛け、部員達に休憩を与えた。鬼コーチが天使のコーチにならざる得なかった。

強姦されてしまった哀しみを癒すまでは届かないものの、やはり豪雨の中でダッシュした時と同じように、陸上部での練習は、傷をうやむやにしてくれそうな可能性を冴子は感じた。言ってみれば、やり場のないヒステリーを、練習という社会的逸脱のない手段でぶつけている。

それにしても、田島から評価されているという気持ちは感じ取れたが、コーチが脇に引っ込んでしまい、冴子が部員全員の練習を仕切らなければならなくなったのは、正直、不本意だった。誰にも気を使わずに自分一人で練習したかった。それで倒れてしまえば、倒れている時間だけ嫌なことを忘れることができる。

それに、自分の出現によって、いつもよりも厳しい練習を強いられた後輩たちが可哀想に思えたり、何よりも後輩達に嫌われたくなかった。普通に街で擦れ違う人に対してでさえも警戒心を抱くようになった。普通に冴子の世界では、学校の陸上部という安全なテリトリーで自分に敵意のある人間は、たとえ後輩であろうと、作りたくない。だから、冴子できることは、精一杯に後輩達を優しく鼓舞

しなければならなかった。

冴子は弱音を吐きそうな一人の部員にこんなアドバイスをした。

「例えば、何かむかついた事とか、辛かったり悲しい経験とか、誰にでも一つや二つぐらいあると思うんだ。そういう鬱憤をこの厳しい練習にぶつけてみなさい。そうすれば、何て言うのかな……。悪人を倒したような爽快な気持ちに近付けるはずだから」

むかついた事、辛かったり悲しい経験に、まさに直面している冴子にとって、何とも皮肉な後輩へのアドバイスであり、それは心理的傷跡を刺激せざる得ない。

翌日の練習の時も、田島は入渡に練習を委任して、自分はパイプ椅子に座りながら部員の練習を眺めているだけであった。完全に一人だけ三年生でもうすぐ卒業する冴子に一任するつもりらしい。

それだけならまだしも妥協はできるのだが、冴子にとっては悪夢の記憶を振り払うためにもっと練習がしたかった。練習だけが冴子が平常心に近い状況でいられる唯一の手段だった。

しかし、田島は冴子を含む部員全員を集合させ、休憩時間を入れた。それもいつもよりも長めの休憩時間である。冴子にとっては拍子抜けしたような気になる。

「田島コーチ。私はまだ大丈夫です。自分だけでも練習を続けさせてください」

冴子は練習を続けたいと、まだ真冬の寒さが厳しいにもかかわらず、汗で火照った顔を浮かべながら田島にそう願いだした。

「ダメだ！そんな事をいつている暇があったら、水分補給と足のマッサージをしろ」

「私は大丈夫です」

と田島の見てるその場で、腿上げを披露した。

「やめる！今は休む時間だ！」

有無も言わさない田島の怒鳴り声が、冴子に浴びせられた。久々に聞いた鬼コーチの雷でもあった。

練習が終了し、解散時間になると、冴子は田島から呼び出された。

お説教されるのかなと腹を据えていると、

「喉乾いているだろう。ほら、これを飲め。他の奴らには内緒だぞ」
田島は冷えたポカリスエットを冴子に差し入れてくれた。汗で体内の水分を消費しきっていた冴子の身体に、そのポカリスエットの味は心地よく一気に浸透した。

「どうせお前は、毎日暇しているんだろう？ 卒業までウチの部に顔を出せよ。ああ見えてもお前の後輩達には、良い刺激になっている。もちろん、お前が居づらくなくなるような空気には俺がさせないから、安心しろ」

その言葉を訊いて、冴子には、自分の家の他に学校の陸上部という帰る場所があることを認識した。

それから連日、陸上部では冴子流の練習が続き、これからという時に田島の「休憩だ！」という邪魔が入る毎日だった。

それでも、いくら冴子が自分自身に課して、結果的に後輩達をも巻き込んでしまった厳しい練習といえども、冴子自身さえも疲労の蓄積は隠しきれなくなってきた。

練習終了後に帰宅して、夕食を済ませて、テレビもろくに見ないで、風呂に入り、夜九時前後には、練習の疲労から就寝してしまう。まるで幼稚園児のような規則正しい生活であるが、そんな生活は、冴子に悪夢の日の出来事の恐怖と妊娠してしまうかもしれない不安が入り込む余地などなかった。

しかし、世の中は冴子の思惑通りのシステムで構成されているわけではない。

その日、学校のグラウンドは雨で濡らされ、当然、屋外競技である陸上部は練習の中止を余儀なくされた。普段よりも過酷度を増した練習から解放された後輩達にとっては恵みの雨だったに違いないが、冴子にとっては普段の学生と変わらない下校時刻に帰宅して、麻衣子が帰宅するまで、自分の不運を呪い、ただ一人孤独に泣き続けるしかないという一日が待っているのを意味した。

仕方なく雨の中、傘を差しながら家路に着く。一人で帰るのはやはり怖かったから、陸上部の後輩の何人かと一緒に帰った。帰宅しながら、そんなに意識しなかったが、冴子はお腹の辺りに違和感を感じていた。

ひとりぼっちで家の自分の部屋に閉じこめると、冴子はもはや完全に記憶に焼き付いてしまった悪夢の日を思い出し、さらに自分の不幸を呪い、泣き始めた。麻衣子が帰宅するまで、家に誰も居ない間は許される唯一のこの時間。

それでも、以前とは涙を流し続けたのとは、異なる現象が冴子の身体に生じていた。腹部の痛みはひしひしとして来て、これは生理の時の痛みに似ていると思わせた。冴子の周期的に考えても生理が来る時期でもあり、それは憶測から確信へと変貌していった。

生理が来た。生理で間違いない。

これで少なくとも冴子から妊娠してしまう不安は消えた。流していた涙も自然と乾いていった。

悪夢の日に着用していた衣服類も、麻衣子の目を誤魔化して無難に処分できたし、妊娠してしまう可能性もなくなったので、強姦にあった事実を誰にも知られないという冴子の中の完全犯罪は成功した。

しかし、残された余韻は、消しゴムで紙が擦り切れるほど消しても消えない文字のように、容易に消せるものではなかった。

それでも、待ち望んでいた生理が来た事実には、『今を幸せに思わなくちゃ』と心の中でおまじないを毎日繰り返して、自分が幸せであると言い聞かせて毎日を過ごすようになった。

相変わらず、黒と白でデザインされている色彩を凝視するは、悪夢の日を連想させられ、耐えられなかった。また、一人で道を歩くと、常に何かに狙われている草食動物になったような気分は消えず、やはり家から歩いて何分の買い物でさえも、緊張感を強いられたのも以前と変わらない。

ただ、生理がもたらしたものは、大きな心理的变化をも与えた。

今までは妊娠する恐怖に怯え続けていたために、涙を流し続けていたが、もうその涙を流す必要はなくなった。冴子は、感動的名作と呼ばれているような映画やドラマなどを見ても、涙を流さなくなつた。妊娠の恐怖と闘い続けた日々を思えば、そんな感動的シーンなどは、傷付いた痛みを知らない制作者側が、飾りを付けた取るに足らないものとしか解釈できなかった。

また、一般的なテレビドラマにおける暴力シーンやそれを連想させるシーンでさえも冴子には過度に残酷に映り、自分が悲鳴を上げてしまいそうで見えいらなかった。さらに殺人事件が起こった時のニュース報道に至っては、被害者の気持ちなど一切理解されずに報道される現実を呪つた。被害者やその遺族の心の傷はそつちのけで、他人の不幸を見せ物にする報道に怒りを覚えるようになった。

とにかく、冴子から涙というものは消えた。

それは中学校の卒業式においても変わらなかつた。周囲の生徒は声を出して涙を流しているにもかかわらず、冴子は感情を無機的なもので支配されてしまったかのように、卒業式という儀式を事務的にそれこそ、一に一を加算したら結果は二になる法則がそうであるように、自分が卒業したら、自分は高校生になるぐらいにしかこの卒業式の意味合いを見出せずにいた。この卒業式で、悪夢の日の記憶が消えてくれるならともかく……。

卒業式の一連の儀式が終了し、冴子は一輪の百合の花と卒業証書とカバンを抱え、保護者の立場で学校に来ている麻衣子と共に、もう帰ろうと校門に向かうと、いつものチャージ姿ではなく、制服姿の陸上部員の後輩達が集まっていた。

彼女たちは冴子の前に近づいき、「高校に進学しても頑張ってください」と寄せ書きがたくさん書かれた一枚の色紙をくれた。去年も一昨年も冴子は卒業していく先輩にこんな粋な計らいをしたことはなかつた。多分、卒業間近に一緒に練習に参加したことが、この後輩部員たちの気持ちを動かしたのだろう。

その光景に同伴していた麻衣子は涙を隠せなかった。

「みんな、ありがとう。ちよつと今荷物がいっぱいだから、家に帰ったら、じっくりとみんなの気持ちを読ませてもらうね」

もちろん、冴子にもみんなの想いが積もった色紙のプレゼントは嬉しかった。

最後の中学生生活を終え、家に帰ると、冴子は荷物を片付けるよりもまず勉強机に座り、陸上部の後輩達から貰った寄せ書きに目を通した。そこには三年間、陸上部で汗を流した勲章というべきものが凝縮されていた。

真ん中に大きな字で『私たちの目標とするすばらしきサッコ先輩』と書かれ、それを囲むようにして、それぞれの部員たちの想いが書かれていた。

『来年は私がサッコ先輩のように、みんなを引っ張って勇気づけるように頑張ります』

『正直言って、私にとって練習はキツすぎました。だけどサッコ先輩が優しく励ましてくれたおかげでここまで来れました。ありがとうございました』等。

これらのメッセージは冴子の胸を熱くさせた。

みんな、本当にありがとう……。

だが、おそらく陸上部に所属していて、一番感動していると言っても過言ではないこの瞬間でさえも、チラチラと無意識に悪夢の日の記憶が理不尽に侵入してくる。テレビや映画に感動できない冴子にとっては、陸上部の想い出は貴重な感動の要素であったのに、そこに恥辱にあった悲しみや憎しみといった感情が入り混ざってしまった。

後輩達の温かい気持ちは心の真にまで響いたのだが、どうしても悪夢の記憶のせいで涙を流すには至らなかった。それは後輩達には申し訳ないという罪悪感を冴子に感じさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8564b/>

傷付くまで痛みを知らない

2010年10月20日15時50分発行